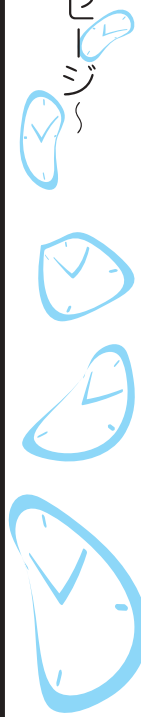


とぎの玉手箱

博物館からのメッセージ



第73回

扇流し

扇を川に流して遊ぶ「扇流し」。美しい景色ならば、どの川でもよいようなものですが、水面に流れる扇といえば、京都嵐山の大堰川と決まっています。

ときは室町時代のこと。嵐山にほど近い嵯峨の天竜寺へ将軍が出かけたとき、童の扇が風にあおられて渡月橋から大堰川へ舞い落ちてしまいました。すると供奉の人々はこれに興じ、我もわれもと競って、川に扇を投じたというのです。

当時、扇は必携のアイテムでしたから、将軍お付きの人々はさぞかし贅美を尽くした品を手にしていったことでしょう。もっとも扇流しの屏風は、この時代には一般化していたようですから、この話は、嵐山という名所にひきつけてイメージされたものに違いありません。

周辺の道具である扇を、絵画

や工芸品にあしらうことは、すでに鎌倉時代に行われ、江戸時代に盛んになりました。扇面を規則正しく配列し、また変化を付けて散らしかけ、さらに流水を加えて扇流しとします。

能装束もこの例外ではなく、ここに取り上げた厚板のようにすぐれた作品が作られました。扇面意匠の伝統の重みを感じないわけにはいきません。江戸時代中期（18世紀）の作品です。

白色の地の全面に青海波（同心円を重ねた波形の文様）を金糸で配します。この厚板の全体が水であるとの設定です。

ここに開いたものから、半開き、そして閉じたものまで、数種類の形の扇を散らしかけるのです。心地よいリズムが感じられます。

扇面にはそれぞれ、春蘭、鉄線、菊、桜花、楓葉などの四季

の植物、七宝繫ぎ、斜格子、三つ亀甲といった割り付け文様、そして浜辺をあらわす洲浜文が、落ち着いた色調の色糸であらわされています。

扇は、平安時代に日本で発明され、早くから絵を描いたり、和歌を書きつけることが行われました。もともと単なる道具ではなく、何らかの趣向が凝らされていたのです。扇をモチーフにデザインする要素は、すでに扇に内在していたともいえます。

しかもこれを水に流れる扇流しとしたところが、いかにも日本的です。きちつとした構図や繰り返しのパターンによることなく、感覚的に配列していく。

配置の角度や位置を変えるだけで、ずいぶん印象は異なります。繊細さと大胆さを兼ね備えたパランス感覚が求められるのです。いいかえれば、こんなところにも、日本人の「間」を重んずる美意識が発揮されているといえます。

（彦根城博物館学芸員 齋藤 望）

写真の厚板は、彦根城博物館の常設展で9月17日(火)まで展示しています。

同(部分)



厚板 白地青海波に扇流し文様 (彦根城博物館蔵)

